

Ⅲ 結果の概要

1 発育状態

(1) 身長

令和4年度の身長を全国平均値と比較すると、男女ともすべての年齢で全国平均値より高くなっている。最も差がある年齢は、男子は10歳で0.9cm、女子は16歳で1.1cm全国平均値より高くなっている。

(表1、図1、統計表第1表、第2-1表、第2-2表)

(2) 体重

令和4年度の体重を全国平均値と比較すると、男子は6歳及び15歳から17歳の各年齢で、女子は9歳、10歳及び14歳から17歳の各年齢で全国平均値より軽くなっている。最も差がある年齢は、男子は15歳で、女子は16歳で0.9kg全国平均値より軽くなっている。

(表2、図2、統計表第1表、第3-1表、第3-2表)

表1 年齢別身長の平均値

(単位:cm)

区分	男子			女子			
	東京都 A	全国 B	A-B	東京都 C	全国 D	C-D	
幼稚園 5歳	111.6	111.1	0.5	110.5	110.2	0.3	
小学校	6歳	117.3	117.0	0.3	116.3	116.0	0.3
	7歳	123.4	122.9	0.5	122.6	122.0	0.6
	8歳	128.7	128.5	0.2	129.0	128.1	0.9
	9歳	134.7	133.9	0.8	135.1	134.5	0.6
	10歳	140.6	139.7	0.9	142.1	141.4	0.7
	11歳	146.7	146.1	0.6	148.7	147.9	0.8
中学校	12歳	154.6	154.0	0.6	152.8	152.2	0.6
	13歳	161.6	160.9	0.7	155.6	154.9	0.7
	14歳	166.1	165.8	0.3	156.9	156.5	0.4
高等学校	15歳	168.8	168.6	0.2	157.9	157.2	0.7
	16歳	170.3	169.9	0.4	158.8	157.7	1.1
	17歳	170.9	170.7	0.2	158.8	158.0	0.8

表2 年齢別体重の平均値

(単位:kg)

区分	男子			女子			
	東京都 A	全国 B	A-B	東京都 C	全国 D	C-D	
幼稚園 5歳	19.4	19.3	0.1	19.0	19.0	0.0	
小学校	6歳	21.7	21.8	△ 0.1	21.3	21.3	0.0
	7歳	24.6	24.6	0.0	24.1	24.0	0.1
	8歳	28.0	28.0	0.0	27.3	27.3	0.0
	9歳	32.0	31.5	0.5	30.8	31.1	△ 0.3
	10歳	36.4	35.7	0.7	35.4	35.5	△ 0.1
	11歳	40.2	40.0	0.2	40.7	40.5	0.2
中学校	12歳	45.8	45.7	0.1	44.6	44.5	0.1
	13歳	51.2	50.6	0.6	47.8	47.7	0.1
	14歳	55.1	55.0	0.1	49.7	49.9	△ 0.2
高等学校	15歳	58.2	59.1	△ 0.9	50.6	51.2	△ 0.6
	16歳	60.0	60.7	△ 0.7	51.2	52.1	△ 0.9
	17歳	61.7	62.5	△ 0.8	52.1	52.5	△ 0.4

図1 年齢別身長の平均値の東京都と全国との差

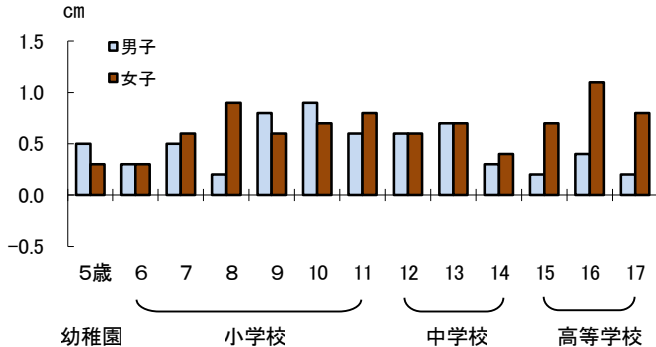
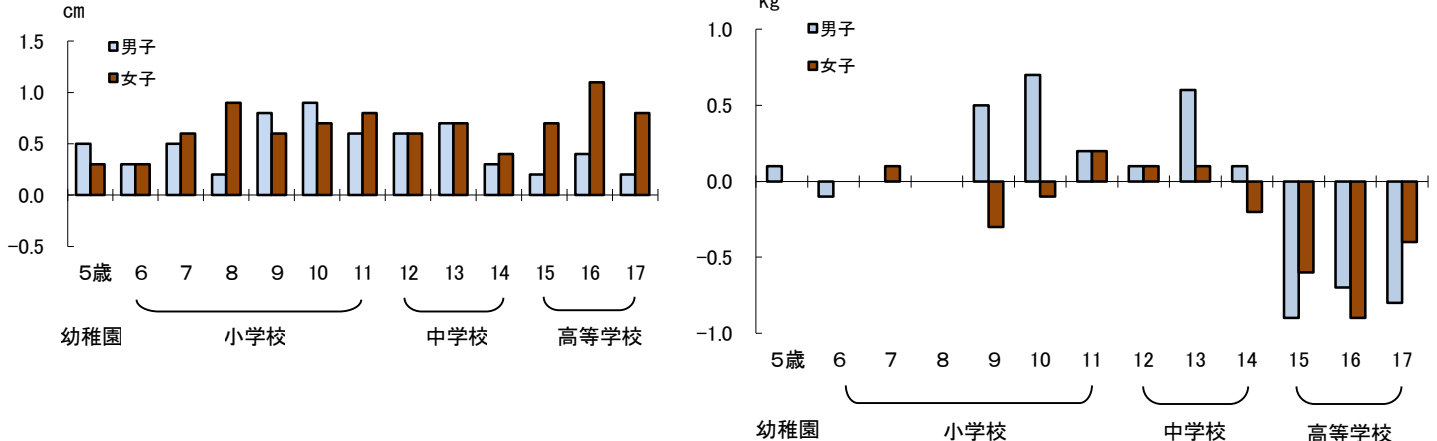


図2 年齢別体重の平均値の東京都と全国との差



2 健康状態

(1) 疾病・異常の被患率等の状況

学校種別に疾病・異常の被患率等をみると、小学校、中学校及び高等学校において「むし歯（う歯）」のある者の割合が20%を超えている。

また、「裸眼視力1.0未満」の者の割合は、小学校において40%を、中学校において60%を超えており、「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合は、小学校、中学校及び高等学校において10%を超えている。

(表3、統計表第4表)

表3 学校種別疾病・異常の被患率等

区分(%)	幼稚園(5歳)	小学校(6～11歳)	中学校(12～14歳)	高等学校(15～17歳)	
90以上					
80以上～90未満					
70～80					
60～70			裸眼視力1.0未満 68.5		
50～60					
40～50		裸眼視力1.0未満 42.9			
30～40				むし歯(う歯) 35.3	
20～30		むし歯(う歯) 27.2	むし歯(う歯) 25.1		
10～20	むし歯(う歯) 16.1	鼻・副鼻腔疾患 11.7	鼻・副鼻腔疾患 12.1	鼻・副鼻腔疾患 11.0	
1～10	8～10	耳疾患 9.7			
	6～8		耳疾患 6.4 眼の疾病・異常 6.0		
	4～6	眼の疾病・異常 4.0	歯列・咬合 4.5	歯垢の状態 5.6 歯列・咬合 5.0 歯肉の状態 4.2	
	2～4	歯列・咬合 3.9 鼻・副鼻腔疾患 3.0 歯・口腔のその他の疾病・異常 3.0 耳疾患 2.9 口腔咽喉頭疾患・異常 2.2 眼の疾病・異常 2.0	歯・口腔のその他の疾病・異常 3.8 歯列・咬合 3.0 アトピー性皮膚炎 2.9 ぜん息 2.7 歯垢の状態 2.2	歯垢の状態 3.2 蛋白検出の者 3.0 アトピー性皮膚炎 2.7 歯肉の状態 2.4 心電図異常 2.3	眼の疾病・異常 3.7 耳疾患 3.5 アトピー性皮膚炎 2.3 蛋白検出の者 2.3 心電図異常 2.1
	1～2	歯垢の状態 1.3 その他の皮膚疾患 1.1 蛋白検出の者 1.0 ぜん息 1.0	栄養状態 1.6 心電図異常 1.6 歯肉の状態 1.4 蛋白検出の者 1.0	歯・口腔のその他の疾病・異常 1.8 栄養状態 1.8 ぜん息 1.7 せき柱・胸部・四肢の状態 1.3	せき柱・胸部・四肢の状態 1.7 ぜん息 1.5 栄養状態 1.1
	0.1～1	アトピー性皮膚炎 0.9	心臓の疾病・異常 0.7 せき柱・胸部・四肢の状態 0.5 その他の皮膚疾患 0.5 言語障害 0.5	顎関節 0.6 心臓の疾病・異常 0.6 難聴 0.5	歯・口腔のその他の疾病・異常 0.9 心臓の疾病・異常 0.5
0.1未満	栄養状態 0.0	顎関節 0.0		結核 0.0 言語障害 0.0	

注1) 「口腔咽喉頭疾患・異常」とは、アデノイド、扁桃肥大、咽頭炎、喉頭炎、扁桃炎、音声言語異常のある者等である。

2) 「歯・口腔のその他の疾病・異常」とは、口角炎、口唇炎、口内炎、唇裂、口蓋裂、舌小帯異常、唾石、癒合歯、要注意乳歯等のある者等である。

3) 「その他の皮膚疾患」とは、伝染性皮膚疾患、毛髪疾患等、アトピー性皮膚炎以外の皮膚疾患と判定された者である。

4) 「心電図異常」とは、心電図検査の結果、異常と判定された者である。

5) 「蛋白検出の者」とは、尿検査のうち、蛋白第1次検査の結果、尿中に蛋白が検出(陽性(+)以上)又は擬陽性(±)と判定された者である。

6) 「尿糖検出の者」とは、尿検査のうち、糖第1次検査の結果、尿中に糖が検出(陽性(+)以上)と判定された者である。

7) 「難聴」については、6歳から8歳、10歳、12歳、14歳、15歳及び17歳、「結核」については、6歳から15歳、「心電図異常」については、6歳、12歳及び15歳、「尿糖検出の者」については、6歳から17歳のみ実施している。

8) 疾病・異常被患率等の標準誤差が5以上、受検者数が100人(5歳は50人)未満、回答校が1校以下又は疾病・異常被患率が100.0%の場合、統計数値を公表しない。

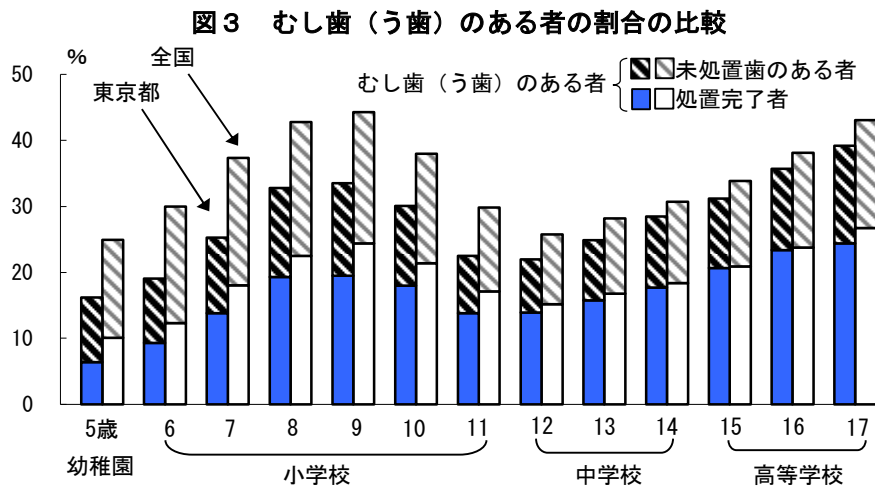
(2) 主な疾病・異常の被患率

① むし歯（う歯）

ア 年齢別に「むし歯（う歯）」のある者（未処置歯のある者と処置完了者の合計）の割合をみると、5歳から9歳までは年齢とともに上昇し、10歳から12歳までは低下している。その後、13歳以降は上昇している。「むし歯（う歯）」のある者の割合が最も高い年齢は、17歳で39.2%となっている。

また、「処置完了者」の割合は、5歳及び6歳を除く各年齢で「未処置歯のある者」の割合を上回っている。

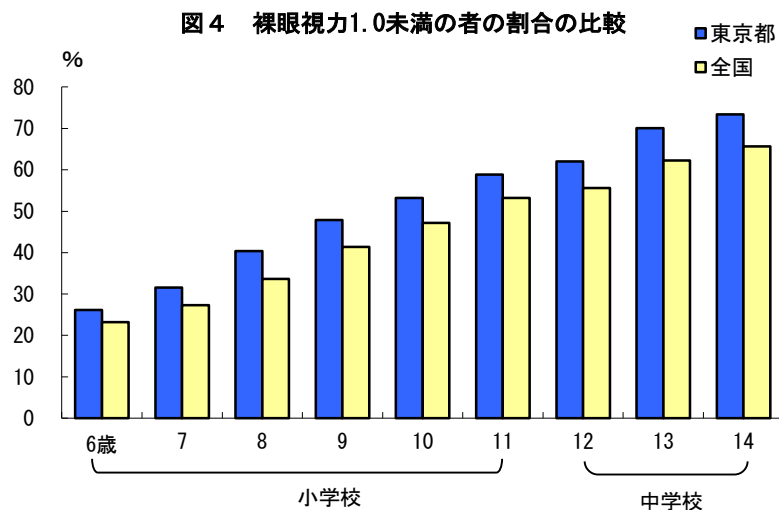
イ 全国値と比較すると、すべての年齢で「むし歯（う歯）」のある者の割合は、全国値より低くなっている。全国値と最も差がある年齢は、7歳で12.0ポイント全国値より低くなっている。（図3、統計表第4表、参考表）



② 裸眼視力

ア 6歳から14歳までの各年齢別に「裸眼視力1.0未満」の者の割合をみると、年齢とともに上昇傾向になっている。「裸眼視力1.0未満」の者の割合が最も高い年齢は、14歳で73.4%となっている。

イ 全国値と比較すると、6歳から14歳のすべての年齢で「裸眼視力1.0未満」の者の割合は、全国値より高くなっている。全国値と最も差がある年齢は、13歳で7.8ポイント全国値より高くなっている。（図4、統計表第4表、参考表）



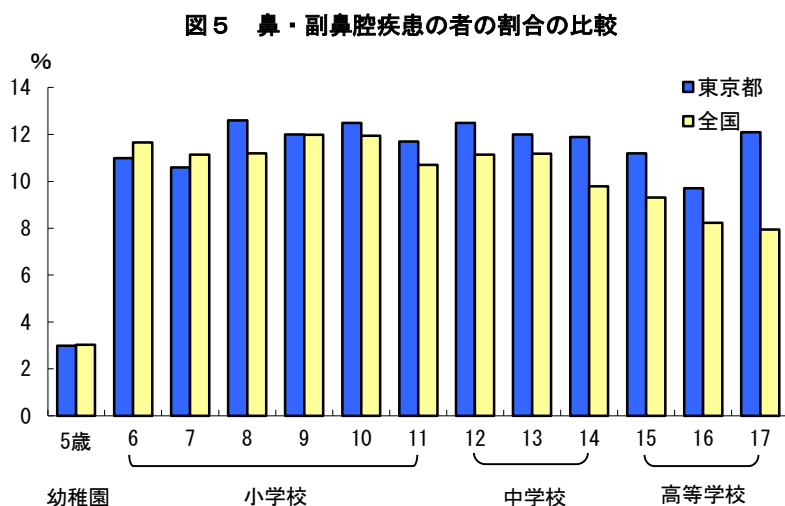
注) 幼稚園児（5歳）及び高等学校（15歳から17歳）については、疾病・異常被患率等の標準誤差が5以上、受検者数が100人（5歳は50人）未満、回答校が1校以下又は疾病・異常被患率が100.0%のため、統計数値を公表しない。

③ 鼻・副鼻腔疾患

ア 年齢別に「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合をみると、6歳から15歳及び17歳で10%を超えている。「鼻・副鼻腔疾患」の者の割合が最も高い年齢は、8歳で12.6%となっている。

イ 全国値と比較すると、5歳から7歳で「鼻・副鼻腔疾患」の者の割合は、全国値より低くなっている。全国値と最も差がある年齢は、17歳で4.2ポイント全国値より高くなっている。

(図5、統計表第4表、参考表)

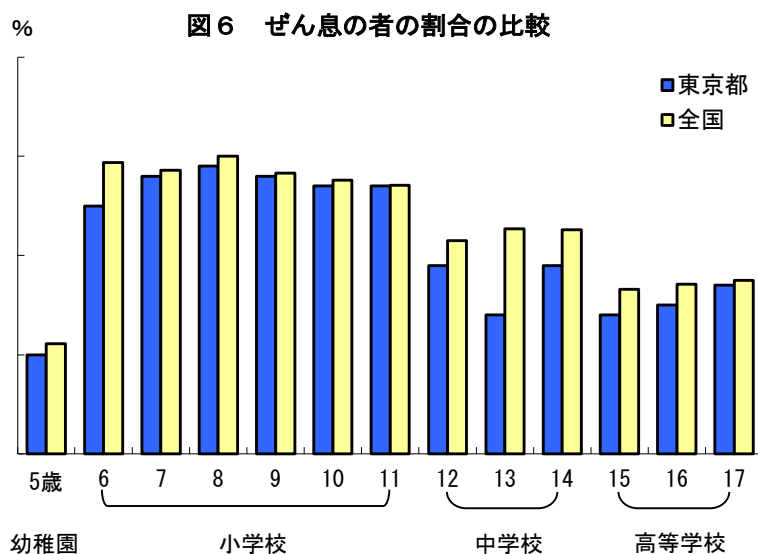


④ ぜん息

ア 年齢別に「ぜん息」の者の割合をみると、6歳から11歳の各年齢で2%を超えている。「ぜん息」の者の割合が最も高い年齢は、8歳で2.9%となっている。

イ 全国値と比較すると、5歳から17歳のすべての年齢で「ぜん息」の者の割合は、全国値より低くなっている。全国値と最も差がある年齢は、13歳で0.9ポイント全国値より低くなっている。

(図6、統計表第4表、参考表)



⑤ アトピー性皮膚炎

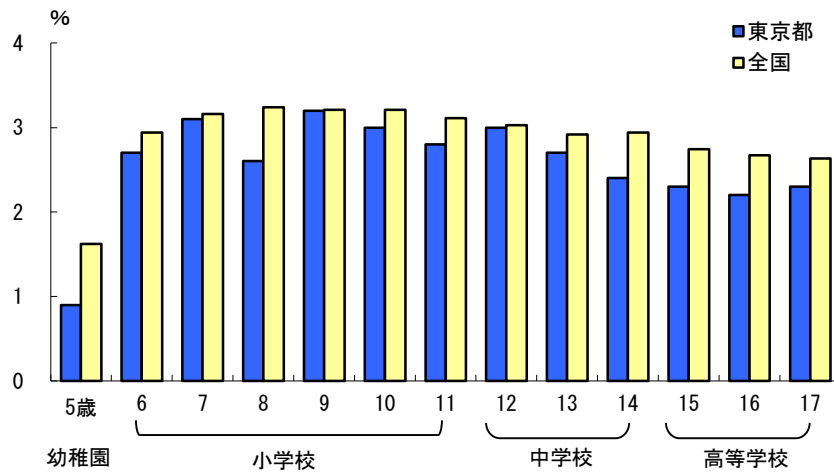
ア 年齢別に「アトピー性皮膚炎」の者の割合をみると、7歳及び9歳で3%を超えている。

「アトピー性皮膚炎」の者の割合が最も高い年齢は、9歳で3.2%となっている。

イ 全国値と比較すると、5歳から17歳のすべての年齢で「アトピー性皮膚炎」の者の割合は、全国値より低くなっている。全国値と最も差がある年齢は、5歳で0.7ポイント全国値より低くなっている。

(図7、統計表第4表、参考表)

図7 アトピー性皮膚炎の者の割合の比較



3 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

(1) 肥満傾向児の出現率

- ① 年齢別に肥満傾向児の出現率をみると、出現率が最も高い年齢は、男子は10歳で15.55%、女子は11歳で9.23%となっている。
- ② 全国値と比較すると、男子は8歳、10歳、13歳及び14歳を除く各年齢で、女子は5歳から17歳のすべての年齢で全国値より低くなっている。

(図8、9、統計表第6表)

図8 肥満傾向児の出現率の比較（男子）

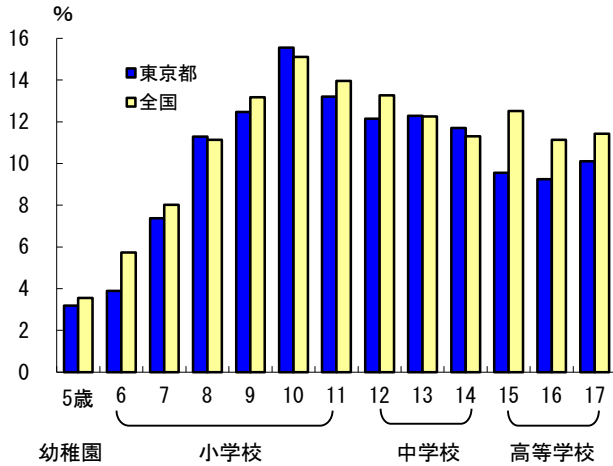
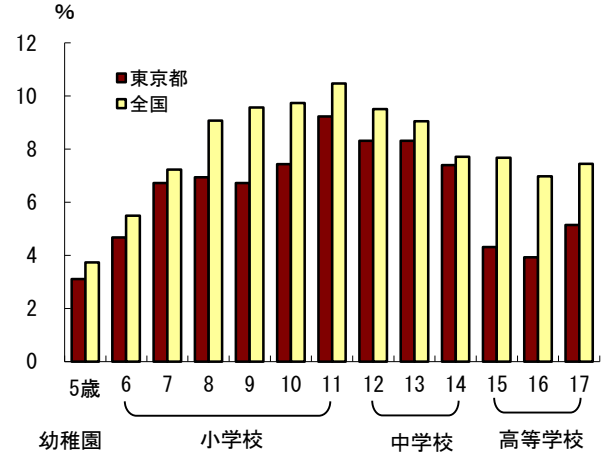


図9 肥満傾向児の出現率の比較（女子）



(2) 痩身傾向児の出現率

- ① 年齢別に痩身傾向児の出現率をみると、出現率が最も高い年齢は、男子は15歳で4.92%、女子は12歳で4.50%となっている。
- ② 全国値と比較すると、男子は8歳から10歳及び13歳を除く各年齢で、女子は6歳、11歳及び14歳を除く各年齢で全国値より高くなっている。

(図10、11、統計表第7表)

図10 痩身傾向児の出現率の比較（男子）

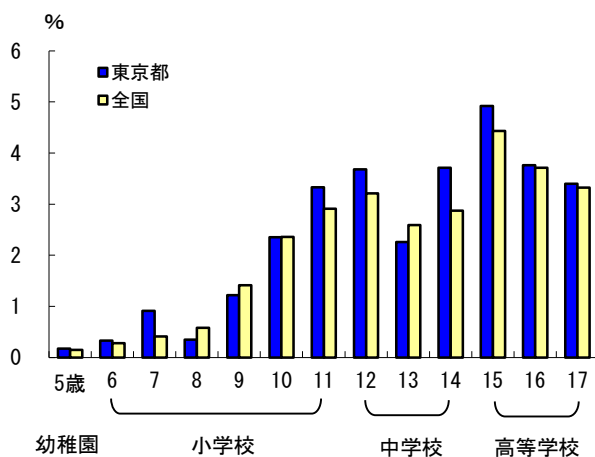
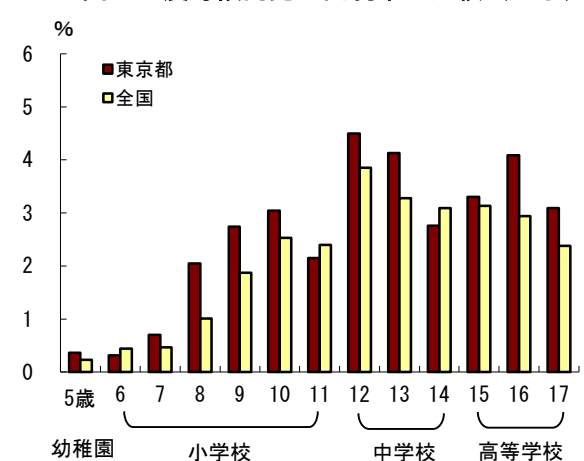


図11 痩身傾向児の出現率の比較（女子）



[肥満・痩身傾向児の算出方法について]

性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を算出し、肥満度が20%以上の者を肥満傾向児、-20%以下の者を痩身傾向児としている。

算式は以下のとおりである。

$$\text{肥満度} = [\text{実測体重(kg)} - \text{身長別標準体重(kg)}] / \text{身長別標準体重(kg)} \times 100(\%)$$

※ 身長別標準体重の求め方

$$\text{身長別標準体重(kg)} = a \times \text{実測身長(cm)} - b$$

年齢	男子		女子	
	a	b	a	b
5	0.386	23.699	0.377	22.750
6	0.461	32.382	0.458	32.079
7	0.513	38.878	0.508	38.367
8	0.592	48.804	0.561	45.006
9	0.687	61.390	0.652	56.992
10	0.752	70.461	0.730	68.091
11	0.782	75.106	0.803	78.846
12	0.783	75.642	0.796	76.934
13	0.815	81.348	0.655	54.234
14	0.832	83.695	0.594	43.264
15	0.766	70.989	0.560	37.002
16	0.656	51.822	0.578	39.057
17	0.672	53.642	0.598	42.339

出典:公益財団法人日本学校保健会「児童生徒等の健康診断マニュアル(平成27年度改訂版)」